

国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業

平成 30 年 4 月 20 日

平成 30 年度 国際的な活躍が期待できる 研究者の育成事業 事業計画調書	(1) 年度	平成 30 年度					
	(2) 応募番号	2	4	4	0	2	1
	(3) 関連研究分野 (細目番号)	3	3	0	3	X	

1. 基本データ

【事業名（研究課題名）】

事業名（和文は40字以内） (和文)	周縁的社会集団と近代—日本と欧米におけるアジア史研究の架橋
(英文)	Marginal Social Groups' Experiences of Modernity: Building Bridges between Historians of Asia in Japan and the West

【代表機関】

機関名	大阪市立大学	2	4	4	0	2
機関長氏名	荒川 哲男					
機関所在地	(〒558-8585) 大阪市住吉区杉本 3-3-138					

【海外の連携機関】（機関が複数ある場合は、すべて記述のうえ、主たる連携機関に◎を付してしてください。）

機関名（英文又は和文）	◎ イェール大学 歴史学部 シンガポール国立大学 人文社会科学部 ノースカロライナ大学シャーロット校 歴史学科 上海大学 文学院歴史学部
-------------	---

2. 事業実施体制

【国際共同研究を行う研究グループの構成】

(1) 日本側研究グループ（事業実施主体）

① 主担当研究者

氏名	フリガナ	所属機関	所属部局	職名	専門分野
塚田 孝	ツカダ タカシ	大阪市立大学	大学院文学研究科	教授	日本近世社会史

② 担当研究者

氏名	フリガナ	所属機関	所属部局	職名	専門分野
佐賀 朝	サガ アシタ	大阪市立大学	大学院文学研究科	教授	日本近現代社会史
井上 徹	イノウエ トオル	大阪市立大学	大学院文学研究科	教授	中国近世近代史
北村昌史	キタムラマサフミ	大阪市立大学	大学院文学研究科	教授	ドイツ近代史
草生久嗣	クサブヒサツグ	大阪市立大学	大学院文学研究科	准教授	ビザンツ帝国史
脇村 孝平	ワキムラコウヘイ	大阪市立大学	大学院経済学研究科	教授	インド近現代経済史
安竹 貴彦	ヤスタケタカヒコ	大阪市立大学	大学院法学研究科	教授	日本近世近代法制史
森下 徹	モリシタ トオル	山口大学	教育学部	教授	日本近世社会史
町田 哲	マチダ テツ	鳴門教育大学	大学院学校教育研究科	准教授	日本近世社会史
八木 滋	ヤギ シゲル	大阪市博物館協会	大阪歴史博物館	主任学芸員	日本近世社会史
人見佐知子	ヒトミ サチコ	近畿大学	文芸学部文化・歴史学科	准教授	日本近世・近代社会史
John Porter	ジョン・ポーター	東京外国語大学	大学院国際日本学研究院	講師	日本近世・近代社会史

(平成 29 年度公募)

## 国際的な活躍が期待できる研究者の育成事業

### ① 当該グループ内の若手研究者（派遣予定者又は派遣者となり得る者）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部局	職名	専門分野
上野 雅由樹	ウエノ マサユキ	大阪市立大学	大学院文学研究科	准教授	オスマン帝国史
彭 浩	ホウ コウ	大阪市立大学	大学院経済学研究科	准教授	近世東アジア史
守田まどか	モリタ マドカ	大阪市立大学	都市文化研究センター	研究員	オスマン帝国史
島崎 未央	シマザキ ミオ	大阪市立大学	都市文化研究センター	研究員	日本近世社会史
吉元 加奈美	ヨシモト カナミ	大阪市立大学	都市研究プラザ	博士研究員	日本近世社会史
派遣者⑥	(公募による)	大阪市立大学	都市文化研究センター	研究員	日本史もしくはアジア史

### (2) 海外の連携グループ

#### A. イェール大学（主たる連携機関）

##### ①主要連携研究者

Name	所属機関	所属部局	職名	専門分野	招へい※
ダニエル・ボツマン	イェール大学	歴史学部	教授	日本近世近代史	※

##### ②連携研究者

Name	所属機関	所属部局	職名	専門分野	招へい※
アラン・ミカイル	イェール大学	歴史学部	教授	オスマン帝国史	※
ピーター・パーデュー	イェール大学	歴史学部	教授	清朝中国史	※
ファビアン・ドリックスラー	イェール大学	歴史学部	教授	日本近世近代史	※
ロヒート・デー	イェール大学	歴史学部	助教授	インド近現代法制史	※
キース・ライトソン	イェール大学	歴史学部	教授	イギリス近世史	※

#### B. シンガポール国立大学

##### ①主要連携研究者

Name	所属機関	所属部局	職名	専門分野	招へい※
ティモシー・エイモス	シンガポール国立大学	人文社会科学部	准教授	日本近世近代史	※

##### ②連携研究者

Name	所属機関	所属部局	職名	専門分野	招へい※
ギャネシュ・クダイシャ	シンガポール国立大学	人文社会科学部	准教授	近現代インド政治史	※
ジー・マイトリ・アウンテーイン	シンガポール国立大学	人文社会科学部	准教授	近現代南アジア・東南アジア政治史	※
アヌ・ジャラス	シンガポール国立大学	人文社会科学部	助教	近現代インド環境史	※

#### C. ノースカロライナ大学シャーロット校

##### ①主要連携研究者

Name	所属機関	所属部局	職名	専門分野	招へい※
マーレン・エーラス	ノースカロライナ大学シャーロット校	歴史学科	准教授	日本近世近代史	※

#### D. 上海大学

##### ①主要連携研究者

Name	所属機関	所属部局	職名	専門分野	招へい※
張 智慧	上海大学	文学院 歴史学部	副教授	日本近世近代史	※

3. 国際共同研究

【採択時公表】

3- (1) 全体概要

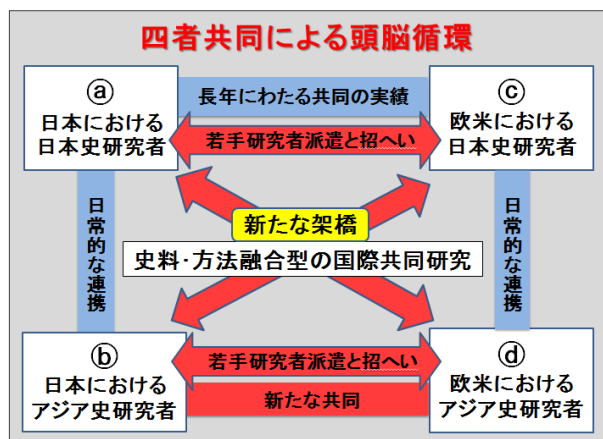
本欄には、本事業を実施することにより、到達目標へどのように繋げていくのかを、2.に記載した実施体制等を含めて、全体的な概念を、図等を使って分かりやすく示した上で、以下に続く3- (2) 研究目的及び到達目標、3- (3) 研究計画・方法の各項目について全体的な概要を簡潔にまとめて記述してください。(図と記述で1頁以内)  
 なお、本欄(3- (1))は採択された場合、採択後本会HP等で公表される予定です。

〔研究目的及び到達目標〕

本事業は、多極化する現代世界において、近代国民国家による社会的包摂と排除のあり方が流動化し、その相対化が不可避となりつつある状況をにらみながら、アジア諸地域における周縁的社会集団とその近代化を研究対象に掲げる。身分や宗教など諸個人の個別的属性に基づく近世の社会編成が、ヨーロッパ帝国主義の圧力下における近代化の過程で、どのように変容したかを、世界史的な視野と一次史料の緻密な分析を融合させた国際共同研究によって解明するのが本研究の目的である。日本における非人や勧進宗教者、オスマン帝国のキリスト教徒などのような周縁的社会集団は、近世的な社会編成の底辺においてその矛盾(社会的包摂と排除)に直面し、その社会構造の特質を体現する存在である。本事業では、こうした周縁的社会集団について、これまで異なる研究手法から分析を進めて来た日本と欧米の研究を架橋し、両者の方法的強みを相互に参照、導入しながら、アジアと日本の事例を比較史的に分析し、アジア史の経験から多極的な歴史像の構築を目指す。

アジア諸地域の周縁的社会集団を対象とする歴史研究のうち、「下からの歴史」やサバルタン研究を輩出した欧米の研究は、俯瞰的な把握に優れる一方で、周縁的社会集団自身が作成した一次史料の不足から、西欧の歴史的経験に基づく人文・社会科学の認識枠組みに依存する傾向が強い。一方、周縁的社会集団自身が残した一次史料の豊富な蓄積と緻密な分析を基礎に発展した日本の日本史研究は、欧米の研究が持つ限界を克服するポテンシャルを持つが、世界史的視野と国際的発信力の不足のため、その水準に見合う国際的貢献を実現できていない。両者の限界は国際的な頭脳循環により克服可能であり、本事業では、日本と欧米のアジア史研究の新たな共同を通じて研究の深化を図りたい。

本事業の内容と到達目標は次の5点である。①大阪市立大学とイェール大学を軸に「周縁的社会集団国際共同研究プラットフォーム」を構築し、国際共同研究と若手研究者の相互派遣を恒常化する。②若手研究者の国際的発信力を強化し、日本の歴史研究を国際的なネットワークに結びつける。③個別セミナーや国際シンポジウムの成果は、英語・日本語による総括報告書などの形で発信する。④周縁的社会集団に関する一次史料読解ワークショップや、史料・方法融合型セミナーを大阪市立大学と派遣先で開催し、その成果を英語圏の若手研究者向けのテキストとして英語で制作し、WEB上で系統的に公開する。⑤若手を含む研究グループのメンバーが高水準の研究成果を、海外の学術雑誌等に、英語など多言語で発表(国際共著論文も含む)する。



〔研究計画・方法〕

本事業の研究グループは、日本史分野で長期にわたり共同研究をしてきた主担当研究者塚田(大阪市大)と主要連携研究者ボツマン(イェール大学)を両軸とし、日本側グループ17名と海外側グループ12名の計29名で組織される。塚田は、大阪市立大学を中心とする日本の研究者を統括する。近代への移行期における周縁的社会集団の「解放」を研究課題とするボツマンは、日本から派遣された若手研究者と、イェール大学所属の日本史・アジア史を専門とする他の連携研究者との連携を強化する。加えてボツマンは、塚田とボツマンの共同研究の影響を受けながら日本の周縁的社会集団を研究してきたシンガポール国立大学などの海外の主要連携研究者・連携研究者を統括する。

平成29年度には、各研究対象地域の周縁的社会集団に関する研究を進め、個別セミナーに参加させるべく、3名の若手研究者をイェール大学などに派遣する。また、ボツマンら5名を日本に招へいし、大阪市立大学で個別セミナーを開催する。平成30~31年度にも新たに計3名の若手研究者をイェール大学などに派遣するとともに、連携研究者の招へいを行い、大阪市立大学やイェール大学で個別セミナーを開催し、研究者間の相互理解を深める。本事業の成果を総括すべく、平成31年度に開催する国際シンポジウムでは、本事業で派遣された若手研究者がそのオーガナイズの中心的役割を果たし、その成果を英文と和文の両方で刊行する。以上の取り組みを通じて、大阪市立大学と関係大学との間で若手の相互派遣を軸とした継続的な頭脳循環を可能とするプラットフォームを構築する。

※本ページは増やせません。

(平成29年度公募)

### 3-(2) 研究目的及び期待できる成果及び到達目標

本欄には、本事業で実施する国際共同研究課題の目的や到達目標等について、焦点を絞り、具体的かつ明確に記述してください。特に次の点については、明確になるよう留意してください。

(記述に当たっては、公募要領6～8頁の「審査方針」を参考にしてください。)

- ① 研究の学術的背景（本研究課題に関連する研究領域の国内・国外の研究動向及び位置づけ、当該研究グループのこれまでの研究成果を踏まえ着想に至った経緯等）
- ② 当該研究領域における本研究課題の学術的な特色や独創的な点、期待できる成果及び事業期間内に何をどこまで明らかにしようとするのか、到達目標とその検証方法。
- ③ 本研究課題を海外の研究グループと共同して行うことによる国際研究ネットワークの強化・拡大に関して期待できる成果、及び客観的な指標に基づく到達目標（国際共著論文等）

※上記②に関する記述の要点には（波線）を、③に関する記述の要点には（太下線）を付してください。また、②、③の両方に関する要点の場合は（二重下線）を付してください。

#### ① 研究の学術的背景および研究目的

現代世界の多極化や、空前の規模での難民・移民の増大といった事態は、近代国民国家が保持してきた社会的包摂と排除の論理の限界を示しつつある。こうしたなか、市民権を基盤とする包摂と排除の論理を歴史的に相対化し捉え直すことは喫緊の課題だが、その際、近代国家の枠組みを基礎付けた欧米の歴史的経験だけではなく、それぞれ固有な回路を経て近代化を進めたアジア諸地域の経験を見直すことが重要である。そこで、本事業では、アジア諸地域の近世・近代史に、しかも、これら社会の周縁に位置づけられ、包摂と排除の双方に直面した周縁的社会集団の経験に焦点をあてる。欧米諸国の帝国主義的な圧力を背景とした近代化の過程で、アジア諸地域の周縁的社会集団が経験した変容の筋道は、帝国主義的な文明観に立脚した単一の歴史像では描くことのできない多様性を持つ。伝統社会のあり方に規定されながら進行したアジア諸地域の近代化とその意味を国際的な方法的交流を通じて解明し、現代における包摂と排除の二元論を相対化することが、本共同研究の課題である。

以上の課題を意識すると、世界的な潮流とは一線を画し、独自の発展を遂げ、分節的な社会像を精緻に描いてきた日本近世社会史研究の蓄積が注目される。本事業の主担当研究者塚田やその関係者たちは、膨大な一次史料の発掘と緻密な読解を通じて、近世日本におけるかわた（えた）や非人、勧進宗教者、遊女などの多様な周縁的社会集団の存在形態と、彼らをめぐる社会的諸関係、さらには、その近代における変容過程を解明してきた。近世の分節的な社会構造から近代社会への移行は、必ずしも均質な市民社会に帰結したのではなく、政治社会レベルでの変容と生活世界レベルでの持続という二局面のせめぎ合いのなかで進んだことを明らかにし、ヨーロッパ近代には必ずしも回収されない歴史像を描いてきた。こうした成果は、周縁的社会集団自身が多量の一次史料を作成する日本近世社会の固有のあり方に立脚している。また、前近代以来の多様な社会の編成形態や固有の秩序を詳細に明らかにしうる点で、日本近世史の史料と方法は、当該分野にとどまらず、アジアをはじめとする他地域の歴史を理解する上でも有効性を持ち、多極的な歴史像形成の基軸となる可能性を持つ。

実際、塚田らの研究成果は、周縁的社会集団に関心を持ちながらも、一次史料の不足から社会像の構築に困難を覚えてきたアジア諸地域を研究対象とする国内の歴史研究者に刺激を与えてきた。また、本事業の主要連携研究者ボツマンなど、海外の日本史研究者の注目を浴び、すでに10年以上にわたり塚田とボツマンらは、日本と欧米の日本史研究を架橋する作業を行ってきた。しかし、海外の日本史研究者を除けば、その国際的な認知度は低く、研究水準に見合った影響力を持つには至っていない。それは、国内の日本史研究者には世界史的視野と国際的発信力に欠ける部分があり、日本の近世社会や近代化経験が持つ普遍性と固有性を、十分に位置づけてこなかった点に起因する。こうした問題点を克服することは、国際的な歴史学研究のなかで日本史研究が持ちうる潜在的可能性を発揮するためにも急務であり、包摂と排除の二元論の相対化が要請される現代的課題にも合致しよう。

そこで本事業では、互恵的な研究交流を通じて日本と欧米の歴史研究者が抱えるそれぞれの限界を克服し、より広い研究上の文脈と国際的な環境のなかで研究を深化させるべく、塚田らの影響を受けつつインドや中国、オスマン帝国を研究対象としてきた日本のアジア史研究者と、ボツマンの影響を受けつつ日本以外のアジア諸地域を研究対象としてきたイェール大学などのアジア史研究者を研究グループに包摂する。そして、西欧の歴史的経験をも参照しつつ、身分や宗教などの諸個人の個別的属性に基づく近世アジア諸地域の社会編成のありようと、それがヨーロッパ帝国主義の圧力を受けながらも地域固有の文脈で再編されていく過程について、周縁的社会集団に注目して国際共同研究を進め、日本及びアジアの歴史的経験から多極的な歴史像を描くことを研究目的とする。

#### ① 本課題の学術的な特色や独創的な点、期待できる効果、到達目標とその検証方法

本課題の独創性は、日本で経歴を積んだ日本史研究者(①)とアジア史研究者(②)、欧米で訓練を受けた日本史研究者(③)とアジア史研究者(④)という、研究者としての背景と方向性を異にしながら関心を共有してきた四者で頭脳循環を行う(四者共同)というその共同研究の組織形態にある(p4図参照)。周縁的社会集団に注目し、実証性を特長とする①、「下からの歴史」やサバルタン研究

3-(2) 研究目的及び到達目標 (続き)

に後押しされ、俯瞰的な把握に優れた④、そして両者の中間に位置する⑥と③を包摂し、それぞれの性格の相違を意識的に乗り越えることを目指すものであり、以下のような特色と効果につながる。

**第一の特色**は、**四者共同という枠組み**である。具体的には、一次史料の不足から社会像を描くことに行き詰まりを感じていたアジア史研究者⑥・④に対し、③の研究成果と方法が新たな参照軸を提供する一方、③は⑥が提供するアジア諸地域の事例や、④の長所である俯瞰的方法を吸収することで、世界史的視野から、そして国際的な研究環境のもとで自身の研究内容に対する理解を深める。西欧の歴史的な経験に基づく人文・社会科学の認識枠組みに依存する傾向が強い④にとっては、欧米中心の一極的な歴史像を相対化することにつながる。また⑥にとっては、③の成果を吸収しつつ、自分野の一流の研究者④と共同研究を行うことで、複合的に研究を深化させる効果が期待できる。近代における周縁的社会集団の変容過程を理解するためには、世界史的な文脈における帝国主義とアジア諸地域の経験を踏まえることが有効であり、③の研究の理論的な深まりと国際的発信力の強化が期待できる。

**第二の特色**は、上記の効果をあげるべく、⑥と③が自らの研究を深めながら研究媒介的役割を果たすとともに、移民集団の社会史を典型とする欧米の事例やそれを対象とした研究手法も参照軸に加え、**多極的・多元的な国際共同研究**を進める点である。日本に軸足を置きながら欧米の事情を視野に入れてきた⑥、欧米に軸足を置きながら日本の日本史研究と交流してきた③という二者は、四者共同のキーだと言えよう。また、欧米圏における周縁的社会集団の経験をここに加えることで、欧米の経験を相対化する試みを相互参照的に実践することが可能となる。

**第三の特色**は、派遣と招へいの機会を利用して開催する**史料読解ワークショップと史料・方法融合型セミナーという独自の共同研究実行形態**を採用し、日本史における史料のあり方やその分析手法や方法的視点を、③が⑥・③・④に伝える点である。これは、③が豊富な史料の存在とそれを通じた社会構造の立体的復元を特長とする③＝日本近世社会史の方法を吸収し、研究の深化につなげるだけでなく、③を経て日本の日本史研究の方法論が④のアジア史研究者や欧米圏を対象とする研究者も含めた海外の歴史研究者にも認知され、その相互参照的な発展を後押ししていくことが期待できる。

③国際研究ネットワークの強化・拡大に関して期待できる効果および到達目標

本事業は参加する多様な研究者の研究深化に有益であり、研究内容面では、周縁的社会集団に注目して近世アジア諸地域の社会の分節構造を横断的に論じ、ヨーロッパ近代に回収されない、多様で多極的な近世～近代移行期の歴史像構成を可能にする。その具体的な到達目標は以下の5点である。

第一に、大阪市立大学とイェール大学を軸とした諸機関の間で「**周縁的社会集団国際共同研究プラットフォーム**」を構築し、若手研究者の恒常的な派遣を通じた頭脳循環の基盤を構築する。第二に、若手研究者の国際的発信力を強化し、優れた成果を蓄積してきた国内の日本史・アジア史研究を国際的な研究ネットワークに結びつける。第三に、最終年度に国際シンポジウムを開催し、**総括報告書『伝統社会の解体と帝国主義—周縁的社会集団の比較史から—』**を日本語と英語で作成する。第四に、**英語版テキスト『史料から見る日本の周縁的社会集団』**を制作してWEB上で公開し、英語圏での若手研究者育成の環境整備に貢献し欧米における日本史研究の裾野を拡大する。第五に、研究グループの各メンバーが各研究対象地域の**周縁的社会集団に関する学術論文を日本語・英語・中国語で、また国際共著論文の形で発表する(期間終了後1年以内に15～20本)**。成果の一部は、大阪市立大学文学研究科都市文化研究センター(UCRC)が発行する英文学術雑誌 *UrbanScope* で特集を組み発表することで同誌のダウンロード(DL)数を飛躍的に高め、国際ジャーナルとしての地位向上に繋げる。これら到達目標の達成度を広く社会に開示し、その評価を測定するため日本語と英語でWEBサイトを作成し、多角的な活動成果の情報発信に努める。WEBサイトへのアクセス数、英語版テキストのDL数、内外で発表する研究論文や国際共著論文の閲覧・DL数、被引用数などでその成果を検証する。

本事業は、大阪市立大学を中心とする日本史研究者のグループが、イェール大学などの日本史研究者とこれまで個別に築いてきた国際研究ネットワークに立脚している。ここに内外のアジア史研究者と欧米史の研究者をも包摂することでネットワークを多角化し、日本史分野にとどまってきたその影響を、広く国際的な歴史学全般に波及させ、水準に見合った国際的な評価を得ていない日本の歴史学研究の地位向上に大きく貢献しうる。さらに、本事業は終了後、大阪市立大学と主要連携機関であるイェール大学を軸とした諸機関の間で「周縁的社会集団国際共同研究プラットフォーム」を構築し、若手研究者の恒常的な派遣を通じた頭脳循環の永続的仕組みを作りあげる。双方の若手多数の参加によりその継続性を担保しつつ構築するプラットフォームは、本事業終了後の永続的な国際共同研究と若手研究者交流の基盤となり、その制度的持続性により事業の成果は客観的に示される。

※本ページは増やしません。